

## 小金井農業のあゆみ

### ～都市化が進む中での小金井農業の転換①～

#### 穀類

明治時代初期には、陸稲・麦類・あわ等の禾穀類の栽培が中心でしたが、あわ等の雑穀類は明治中期で消滅しました。麦類・陸稲は大正時代までは中心的な作物でした。戦中、戦後の食糧難の時代も増大の傾向をたどりますが、食糧難が過ぎ、食生活の変化や労力の不足などの影響と都市化が進むにつれ野川流域の水質も悪化したことから、昭和45年に水田は終田しました。水田跡の碑は前原町に建てられています。



水田跡の碑



当時の田植えの様子



イモ掘りの様子



ダイコン干しの様子

#### 果樹

栗は新田開発期から栽培されている最も古い歴史を持っている特産物の一つです。大正時代には栽培が本格化し、100haを越す栗林が広がっていました。昭和の初期は養蚕の後退が進んだことにより桑畑が栗畑に転換され増大の傾向をたどります。戦時中は雑木林扱いであったことからさほど減少はしなかったのですが、戦後にクリタマバチの被害を受け壊滅状態となります。その後、クリタマバチに強い「利平栗」が導入され昭和35年には、栽培面積36ha、栽培戸数70戸となりました。栗は労力が軽減できること等から現在に至っています。梨は昭和38年頃から様々な品種が栽培されています。昭和の後期にはキウイフルーツの苗をニュージーランドから取り寄せ、三鷹地区で試験的に栽培され小金井地区でも1haを超えるほどに植え付けられています。ブルーベリーも小平地区で植え付けられましたが、当市でも植え付けられ販売されています。

#### いも類

小金井農業ではさつまいもを中心とし、じゃがいも、さといもなどが昔から栽培されていました。時代の特産品として重宝されたり、戦中、戦後は食糧難を乗り切る作物でした。当時と比較すると収穫面積は減少傾向ですが、余り労力を要さないことから現在も生産が続けられています。

#### そ菜類

穀類等の栽培面積が減少していくと、そ菜類の作付け面積が増大しました。小金井のそ菜栽培は冬の副業となる「沢庵漬け」にする干しダイコン種の栽培で始まったといわれています。オート三輪車が出現し、武蔵小金井駅が開設されると同時に練馬地区から拡大したものが小金井の農家でも栽培されるようになりました。その後、淀橋と神田市場へ共同出荷が行なわれるようになり、拡大されていきます。また、キュウリ、ナス、トマトやゴボウ、ネギの作付けも盛んに行なわれるようになりました。



収穫間際の栗



収穫間際の梨



キウイの花粉付けの様子